

心理学史の中の 女性たち

【第2回】



Goodenough, Florence (1886-1959)

American Men of Science の1936年版は、ミネソタ大学のフローレンス・グッドイナフを取り上げた。MAN (MEN) を性別のオトコだけでなく「人」と訳す場合があるのは何故なのか？ それは、かつて（もしかしたら今も）、人間とは西洋白人男性のことであり、それ以外は人間としてカウントされなかったからかもしれない。東洋でも同じように男性のみが人としてみなされがちであった。たとえば、日本で普通選挙法が施行されたのは1925年だが、そこで選挙権を与えられたのは男性のみでしかなかった。なお、この *American Men of Science* は心理学者キャッテルによって1906年に創刊された雑誌で、1971年には *American Men and Women of Science* に改名された。

1886年、ペンシルベニアで8人きょうだいの末っ子として生まれたフローレンスは、教育熱心な両親に育てられ、ティーチャーズ・カレッジ（教師養成大学）を卒業し、地元の学校で10年ほど教師を務めたあと、有名な Vineland Training School に併設されたニュージャージーの公立学校に赴任する。そして1920～21年にわ

フローレンス・グッドイナフ

サトウタツヤ

立命館大学総合心理学部教授。学校法人立命館・学園広報室長。日本心理学会教育研究委員会資料保存小委員会委員長。Gifted Childrenの訳は養子だと思っていた時期がありました。。。



たって、コロンビア大学で修士号を得るため、ソーンダイクに師事して学業と研究に励んだ。また、ホリングワースにもアドバイスを受けた。この頃のコロンビア大学は、動物心理学、実験心理学、心理測定法、様々な応用心理学が鎬を削っており、見ようによっては活気にあふれ、見ようによっては乱雑で混乱した状態であった。そのような中、フローレンスは才能のある子ども（Gifted Children）に興味をもち、ターマンと共に研究を続け、1924年に博士号を与えられた。彼女のテーマは言語を用いない知能検査の開発であった。子どもたちの描画を集め始め、それを知能検査として用いようと考えたのである。たとえば、下図はある三歳児の人物画を模したもののだが、顔から手足が出ており、胴体がないという特徴があり、胴体を描くには一定の年齢が必要であることは今ではよく知られた事実である。



フローレンスが1926年に開発した人物描画（Draw-a-Man）検査は、2～13才が対象であり、その当時の知能検査の結果とよく相関しており、他の知能検査とは異なり簡便に施行できることが特徴であったがあまり受け入れられなかったといえる。

また、フローレンスはターマンと共に、言語を用いるオーソドッ

クな知能検査の開発も行っていた。また1940年代以降に投影法的な検査が一世を風靡する時にも、基本的には伝統的な手法を用いつつ、一部投影法を使いながら海軍における下士官選抜の検査も開発した。彼女はビネが知能検査を開発する際に用いた質的分析にも光をあて、質的方法（分析）の妥当性や有用性についても、認めるべきことは認めていた。

1930～40年代、いわゆるIQ論争が起きた。それまでの知能検査が前提としていた考えが疑われるようになり、知能が生得的で不変なのか、知能検査があらゆる子どもたちに公平／公正な検査なのかが争われるようになった。初期においてフローレンスはターマンと共に知能は変わらないという論陣を張ったが、後に、その考えを改めるにいたった。それは彼女がソーンダイクから教えられたスローガン「エビデンスに基づいて考えよ」に従ったからであった。また、この時期は女性心理学者／科学者の地位向上のための役職も引き受けていた。

50代頃から体調を崩しがちだったフローレンスは糖尿病の影響もあって失明に近い状態になり、1947年に教授職を退いた。しかし、その後10年間は精力的な研究活動を維持し、自身が開発した人物描画検査についての著書や、当時のスタンダードとなった発達心理学のテキストなどを出版した。

1959年、フローレンスは、フロリダに住む姉を訪ねている時に心臓発作で亡くなった。